

平成 30 年 9 月 4 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02942

研究課題名(和文)カロリング期修道院における「合理的組織運営」再考

研究課題名(英文)Reexamination of the "Rationalism" in the Mmanagement of Carolingian Monasteries

研究代表者

丹下 栄 (TANGE, Sakae)

早稲田大学・地域・地域間研究機構・その他(招聘研究員)

研究者番号：10179921

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：コルビー修道院長アダラルドに関わる諸史料は彼が現場への権限委譲、貨幣の多面的利用(富の送達・必要物資・労働力の入手、財の価値評価と可視化)を通じて、状況に迅速・的確に対処しうるコンパクトで透明性の高い組織体の構築をめざしていたことを示している。透明性は台帳への記録と最後の審判への恐れ(そのとき人はこれまでの行動について説明を求められる)によって担保された。カロリング期修道院における「合理性」は実務的・神学的コンテクストに規定された「説明可能性」を重要な基盤の一つとしていたと思われる。

研究成果の概要(英文)：Some documents concerned Adalard (abbot of Corbie abbey) show the intention to introduce into his abbaye a compact and transparent management system able to deal with a difficult situation immediately. To realise his plan, he leave a power of judgement to managers of each post and make full use of the varius functions of the money: preserve or transport the value, procure the necessities and indicate the worth of goods. The transparency of the system is based on the entry in the account book and the fear of the Last Jugement (on that occation man must account for his past conduct). The "rationality" in the carolingian monastery consists, partially at least, in the accountability in practical and theological contexts.

研究分野：西欧中世史

キーワード：カロリング期 修道院 アダラルド コルビー修道院 コルヴァイ修道院 合理性 説明責任

1. 研究開始当初の背景

西欧近代社会のエートスたる合理性追求はその主要な源流の1つを中世の修道院における合理的所領経営・組織運営に持つという言説がしばしば語られる。しかしそれはともすれば一種の近代化論に回収されて深化の途を閉ざされたままとなる傾向にあった。「合理性の追求」はほぼ自動的に「費用対効果の高度化」や「利潤追求」に読みかえられ、それを、これもまた先験的に信じられてきた「キリスト教の反利潤追求指向」とどのように折りあいをつけて理解するかという点がもっぱら問題とされてきた。したがって伝統的研究では、中世修道院に関わる諸史料にしばしば現れる rational / rationabiliter 等の語(たしかに現代語訳すれば「合理性」の意味を含む)が意味するところの多様性が関心の対象となることは稀であった。

しかし近年、伝統社会を対象とする諸研究は、「合理性」がそれぞれの社会において固有のコンテクストに即して理解され、また追求されてきたことを強く認識するようになってきている。さらに初期キリスト教史研究は、特に教父時代に広く流布し、その後も命脈を保った言説のうちには必ずしも商業敵対的ではなく、むしろそれとの親和性を示す一面を持つものもあったことを明らかにしている。このような研究状況を背景として、本研究はカロリング期修道院の組織運営における「合理性」の内実を探り、その歴史的・社会的意義を宗教的コンテクストをも視野に入れて再検討することを目指して開始された。

2. 研究の目的

本研究の目的は第一義的には、カロリング期修道院における所領経営・組織運営の実態解明とその基盤にある戦略の読みとりにある。具体的には、組織運営においてどのような事項が優先されたのか、また意思決定にはどのような条件が考慮されたのかを解明し、それがどのような社会的・政治的・宗教的コンテクストと関連していたのかを明らかにすることで、カロリング期修道院における組織運営の基本戦略に迫り、その作業を通じてこうした組織を重要な構成要素とした中世初期社会の特質を探る手がかりを見いだすことが、本研究の当面の目標となる。

3. 研究の方法

研究の第1段階としては、カロリング期修道院の組織運営について、具体的情報を最も豊富に含む史料の1つである、フランス北部、アミアン近郊所在のコルビー修道院で院長アダラルが作成した『指令集』(822年)に含まれるさまざまな指令を摘出し、それに通底する戦略を解読する。次に第1段階の知見を参照軸として、やはりアダラルに

直接的・間接的に関わる諸史料からも同様の戦略を読みとることができるかを検討する。研究を進めるにあたっては特に中心的課題として、アダラルが創建に尽力したコルヴァイ修道院(ザクセン地方)の初期史に着目し、コルビー修道院において実践されてきた組織運営がコルヴァイ修道院の創建にどのように関わっているのかを検討する。

またイタリア王の後見・摂政として同地滞在中にアダラル自身が仲介に関わった教会組織間の土地交換を記録した文書、ランス大司教ヒンクマルが著した『宮廷の組織について』De ordine palatii と呼びならわされた著作の後半部に再録されたアダラルによる宮廷と国の組織に関する覚書、さらにアダラルとともにコルヴァイ創建に関わった彼の異母弟ワラが晩年にボッピオ修道院で作成した指令などの史料をとりあげ、『指令書』に読みとれる戦略が他の地域(イタリアおよびザクセン)においても適用可能であったか、またそれは地域的条件によってどのように変化したのかを検討することとしたい。

4. 研究成果

前項に記した作業を進めた結果、以下のような点が明らかになった。

『指令集』における眼目の1つは財の的確な分配であった。この任務はすでに『ベネディクト会則』において修道院長の専決事項として明示されている。しかしアダラルは(それに明示的に反対しているわけではないが)例えば巡礼や貧民への対応、彼らに対する物資提供において、現場責任者の裁量を大幅に認め、「神の意思を慮って」独自に判断するよう指令している。ここで注目すべきは神の意思を慮る理由として、各人が最後の審判において自己の行動について説明する義務があることを記している点である。最後の審判への言及は『指令書』に数回にわたって現れ、徴税実務担当者は「神を畏れる者」から選ぶようにという指令とも相まって、修道院における組織運営が神に対する説明責任を意識しつつ行われていたことを示唆している。

『指令集』に関して次に指摘されるべきは、アダラルが領民の疲弊を回避することに意を注いでいた点である。特に疲弊の元凶とされたのが遠隔所領から修道院本拠への物資運搬で、『指令集』は遠隔所領からの運搬を免除し、納めるべき生産物は現地で売却・換金し、修道院本拠には記帳された情報を伝えればそれで良しとしている。そして運搬が必要な場合には生産物を収受した職務担当者が自己の費用で運搬担当者を雇傭してそれを行うよう規定されている。

住民の負担を「受忍限度内」に納めようとする指向は、『宮廷の組織について』にも見いだすことができる。ここでアダラルは

宮廷の上級官職保持者対して、巡回する王と宮廷の行程や規模についての正確な情報を滞在予定地の責任者に速やかに伝え、現地の関係者に余計な負担がかからぬよう、また王に対する応接が不十分にならぬよう配慮することを命じている。住民/領民の負担軽減と直接の関係はないことながら、『宮廷の組織について』、『指令集』はいずれも随所で、正確な情報をしかるべき箇所に速やかに伝えることを命じている。的確な判断や周到な準備のためには正確な情報が必要であるとする点で2つの史料はきわめて親しい関係にあると言える。

長距離物資運搬に起因する領民の疲弊を防ごうとする指向は、遠隔地に所在する所領に対する低い評価、そして所領を修道院本拠(あるいは所領管理の拠点)の周辺に集約しようとする戦略へつながっていく。この戦略は813年にアダラル行った土地交換の仲介を記録した文書においてすでに明らかとなっている。この文書において彼は当事者の口を借りて、土地交換によって所領を本拠地の周辺に集約して徴収した生産物等の運搬コストを減らすことがもたらす交換当事者双方にとってのメリットを強調している。

さらに、『指令集』が貨幣を所領経営・組織運営のツールとして重視している点も注目し得る。貨幣は外部労働力の調達(菜園での労働、生産物の運搬)や富の保存(余剰生産物を売却=換金して蓄積)に用いられた。備蓄された貨幣が非常時に必要物資の調達に用いられるさまを、コルヴァイ修道院の創建事情を詳細に記録した『聖ウィトゥス移葬記』が活写している。それによれば、ザクセンに設けられた修道施設の苦境を救うためにアダラルは貨幣を現地に送り、しかるべき物資を近隣で調達するよう指令した。この救援活動が行われたのとはほぼ同時期に書かれた『指令集』に見られる、物資の長距離運搬が領民に多大の労苦を強いているとの記述は、それまでコルビー修道院が行ってきた支援活動が現物の運搬を主体として、しかし多くの労苦にもかかわらず効果は限定的であったこと、アダラルが行った貨幣を用いた救援策が記録に値するほどの画期的なものであったことをうかがわせている。

ここまで述べてきたコルビー/アダラル関連史料の検討からは、コルビー修道院における組織運営・所領経営に通底する指向・戦略として、現場裁量の重視、貨幣の多面的利用、の2点が浮かびあがってきたと思われる。に関して、貨幣を用いた不足物資の調達が各地で行われていたさまは9世紀半ばにフェリール修道院長職にあったルプスの書翰からもうかがうことができる。そして財の価値を可視化するという貨幣の機能をアダラルはすでにふれたイタリアで行った土地交換の仲介においても十

分に活用していた。彼は現地に赴いて交換の対象となる土地の価格を調査し、それをもとに交換比率を決定した。こうして当事者双方が満足する交換が実現した、とアダラルは自賛している。

そして に関しては、コルヴァイ修道院がコルビーの娘修道院としてではなく独立した修道院として創建された(修道院長はアダラルが兼任していたが)ことそれ自身が、修道院の所領空間をむやみに拡大せず、管理組織をコンパクトなものに保とうとするアダラルの戦略と関連していたと言える。彼はコルビー修道院所領のうちザクセンに所在するものを新設の修道院に移管し、また将来的には2つの修道院がそれぞれ別の修道院長を戴くべきと考えていた。これらもまた、遠隔所領の回避=所領の集約という文脈で理解されるべき一面を持っている。ちなみにコルヴァイ修道院は9~10世紀を通じて数多くの寄進を受けて所領を増大させていくが、その大半はいくつかの拠点の周辺に集約されている。このことをアダラルの戦略がコルビーにおいて維持されていたことの兆候と見なすのは、決して不可能ではないと思われる。

アダラルが『指令集』に書きしるした組織運営・所領経営に関する諸指令は、所領の野放図な空間的拡大をいましめ、領民を動員した物資の運搬に批判的である点など、これまで筆者を含む何人かの中世初期社会をフィールドとする研究者がサン・ジェルマン・デ・プレ修道院(パリ)のそれをはじめとする所領明細帳をもとに想定してきたカロリング期大所領像(多様な政治・経済中心地への所領の立地、運搬賦役を梃子とした空間把握)とは多くの点で対立するものである。コルビー修道院の事例が例外的存在なのかどうかを見きわめることは、今後の課題としてカロリング期大所領の歴史的意義を検討するうえで避けて通れぬ問題である。

いまひとつ注意すべきは、アダラルによる組織運営戦略の根底には神に対する説明責任という神学的コンテクストが存在していた点である。したがって、現場で具体的情報を持った者の判断を尊重して迅速で的確な意思決定を担保し、また貨幣の価値表示機能を活用して利害関係者館のコミュニケーションを円滑にするなど、現代的意味での「合理性」にも通じる局面にのみ着目して中世初期修道院における「合理性」を強調することには大いなる危険が伴うと言わねばならない。

しかしまた、アダラルがくり返し強調した、終末論に裏打ちされた説明責任は、帳簿に記載された情報の信頼性を担保するものとしての宗教的コンテクストに着目する近年の会計研究史の成果とも結びつく部分を持っていると言える。その意味で、アダラルに関わる史料から読みとれるこ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

とがらの射程はカロリング期のフランク世界という時間的・空間的枠を超えて広がっていると言うことは十分に可能と思われる。

主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

丹下 栄「カロリング期教会組織による財産管理の一面。価値の可視化」社会経済史学会九州部会7月例会(2016年7月9日、鹿児島大学法文学部)

〔図書〕(計 2 件)

森原 隆(編)『ヨーロッパの政治文化史。統合・分裂・戦争』成文堂, 2018(丹下 栄「コルヴァイ修道院とザクセン統合」, p.3-17を担当)。

Alain Dierkens, Nicolas Schoeder, Alexis Wilkin (dir.), *Penser la paysannerie médiévale, un défi impossible? Recueil d'études offert à Jean-Pierre Devroey*, Éditions de la Sorbonne, Paris, 2017 (Sakae TANGE, "Le grand domaine carolingien comme nœud social", p.147-160を担当)。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

丹下 栄 (Sakae TANGE)

早稲田大学・地域・地域間研究機構・招聘

研究員

研究者番号：10179921

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()